

平成21年度研究開発自己評価書

研究開発の内容

1 教育課程

(1) 編成した教育課程の特徴

A 人間関係学科（HRS、あいあいタイム）の取組

研究開発の特徴

- ・松原市立松原第七中学校区（以下松原七中校区とする）の全児童・生徒を対象に指導した。
- ・松原七中校区の全教職員がその研究開発に携わり、指導にあたった。
- ・幼・小・中11年間で育成するスキルとして12のターゲットスキルを定めた。
- ・参加体験型（ワークショップ）の学習スタイルを中心に取り組み、ファシリテーションにより、児童・生徒の自己肯定感、自己効力感を高め、社会的有用感につながっていくことをめざした。
- ・幼・小・中11年間の流れの中で、「ソーシャルスキル」「出会いと気づきの学習」を系統的に学び、力を育むことができるプログラムをめざした。
- ・ストレスマネジメント、教育相談などの心理学的手法やグループアプローチなどに關した先行する研究や実践の成果に学びながら、行事や道徳の時間・特別活動・総合的な学習の時間などと結びつけて研究開発を進めた。
- ・市民性を身につけていくために、アサーティブな考え方と行動から公平・公正の考え方と相手を尊重できる共感性を学び、ディベートの手法などを活用し、対立を解消していくためのロールプレイ等に取り組んでいくことで「アサーティブな人間関係調整力」の育成をめざした。

カリキュラムの作成

- ・校内授業研究、校内研修、松原第七中学校区人権教育研究会の公開授業、校区研修、校区プログラムプロジェクトなどを通じ、松原七中においては、これまで研究開発した「人間関係学科」のカリキュラムを改善し、恵我小・恵我南小においては、「人間関係学科」のカリキュラム案を作成するための、プログラムづくりを行なってきた。

B 不登校生等配慮を必要とする生徒を対象とした「ほっとスペース」の教育課程編成

不登校生等への支援体制の強化

- ・不登校生等支援会議、「こころプロジェクト」等を通じて、継続的に不登校生等の現状把握、支援目標づくり、校内連携組織の点検活動などを行った。
- ・不登校生等への「こころ支援」「体験支援」「学習支援」を教職員、関係諸機関との連携のもとで実施し、必要に応じて保護者に対するソーシャルサポートをコーディネートした。
- ・校区不登校児童生徒支援会議において、年間欠席日数10日以上の児童生徒の引き継ぎと登校状況の把握をおこなってきた。

「ほっとスペース」での教育課程編成

- ・個に応じた教育課程を編成するよう工夫した。

- ・体験学習を中心とした人間関係学科の充実を図った。
- ・合科的指導方法を実践した。

(2) 教育課程の内容は適切であったか

以下の理由により、教育課程の内容は適切であった。

人間関係学科の取り組みに關係する児童・生徒対象のアンケートの項目については、下記のとおりである。

小学校では 人間関係学科（あいあいタイム）授業後、毎回のアンケートの平均より

| | |
|------------------------------|-------|
| 「あいあいタイム」は楽しかった。 | 94.4% |
| 「あいあいタイム」の内容はよくわかった。 | 93.2% |
| 「あいあいタイム」で今まで気づかなかつたことに気づいた。 | 85.4% |
| 「あいあいタイム」は役に立った。 | 83.3% |

中学校では 人間関係学科（HRS）の自己評価 - 2学期末 - より

| | |
|-----------------------------------|-------|
| 「HRS」の内容はよく分かった。 | 92.2% |
| 「HRS」の学習で、今までに気づかなかつたことを学ぶことができた。 | 87.4% |
| 「HRS」で、人とのつきあい方に関心が高まった。 | 77.0% |
| 「HRS」で学んだことを、普段の生活に役立てた。 | 46.6% |

体をつかった参加体験型学習（ワークショップ）を通じて、興味・関心を広げることができる教科学習を展開した。

11年間に獲得させたいターゲットスキルを以下のように設定し、取組を始めた。これに基づいて取り組んでいくなかで、小学校と中学校との接続の観点からプログラムを研究開発する必要性が見えてきた。

| | 幼稚園 | 低学年 | 中学年 | 高学年 | 中学生 |
|------------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 自己信頼 | | | | | |
| 共感性 | | | | | |
| 自己管理力 | | | | | |
| 対人関係 | | | | | |
| 境界設定 | | | | | |
| コミュニケーション力 | | | | | |
| ストレス対処 | | | | | |
| 感情対処 | | | | | |
| 決断と問題解決 | | | | | |
| 創造的思考 | | | | | |
| 批判的思考 | | | | | |
| 情報活用力 | | | | | |

は人間関係学科を中心にして実施

は過渡的な取組として

はあそびと人間関係学科を中心にして

道徳の時間・特別活動（学校行事・学年行事）・総合的な学習の時間と結びつけて、取組を進めていくなかで、人間関係づくり（集団づくり）や行事に生かせたり、目標の達成にプラスとなった。

(3) 授業時間等について工夫

設定したスキルを子どもたちに獲得させるために、学習期間を定めたパッケージ方式をとった。

2 指導方法・教材等

(1) 実施した指導方法等の特徴

指導方法の特徴

- ・体をつかったワークショップを通じて、子どもたちが参加体験できる指導方法を基本としたプログラムを開発した。
- ・子どもたちの主体性や創造性を高めるためにロールプレイの手法を取り入れた。
- ・パッケージ方式のプログラムを作成した。
 - a)パッケージのねらいを明確にし、そのねらいを具体化するために、1パッケージ3～5時間で授業を組み立てた。
 - b)1時間毎の始めにウォーミングアップとして、体や気持ちをほぐすアイスブレーキングなどの手法も採り入れた。
 - c)参加体験型学習の核となる毎時間のエクササイズに先立って「ねらい」を共有し、ルールを徹底させるためのインストラクションに取り組んだ。
 - d)スキル学習の時間では、モデリングなどの指導方法も採り入れ、子どもたちの観察力を高め、体験学習として子どもたちが「般化」できることをめざした。
 - e)授業を展開した後、シェアリングとして「ふりかえり」の時間をとり、子どもどうしの「気づき」から「学び」を共有できるよう努めた。
 - f)単なるスキル習得の時間に終わらせるのではなく、人間としての「あり様」として外に対して開かれたアサーティブな人間育成をめざした。

教材等の特徴

- ・先行研究や先進的実践、大阪府教育委員会の「いじめ対応プログラム」などを参考にしながら、子どもたちの実態を考慮し、アレンジまたは独自に作成した教材を活用した。
- ・授業の終わりに記入する「ふりかえりシート」における子どもたちの「ふりかえり」や「気づき」を教材開発に生かすとともに、データ集積することを通じて、子どもたちの変化や成長をいち早くキャッチするように努めた。

授業の形態等の特徴

- ・基本的には、クラスを基盤とした授業であるが、場合によってはクラスを2分割した少人数指導や学年全体で実施した。
- ・複数教員で指導にあたることをめざした。担任・副担任のペア、学年教員のペアなど、プログラムの内容に応じて変化させて取り組んだ。

(2) 指導方法等は適切であったか

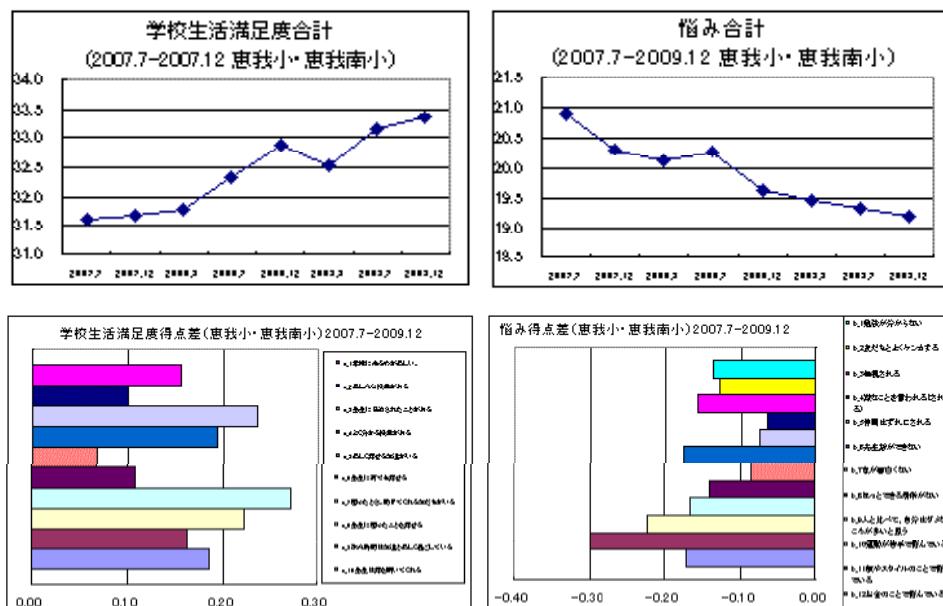
- ・「学校生活調査」や「ふりかえりシート」などを通じて、人間関係学科実施直後や学期毎の子どもたちの「気づき」や「学び」を、子どもたちや教員が共有することをめざした。そのプロセスを通じて人間関係学科による子どもたちの中に生まれてきた「規範」や「ルール」を教員は大切にしてきた。その結果、次項で述べているように、学校生活満足度、悩み、ストレス反応、コーピング等に実施の効果が表ってきた。よって、指導方法は課題をかかえながらも適切であったといえる。

実施の効果

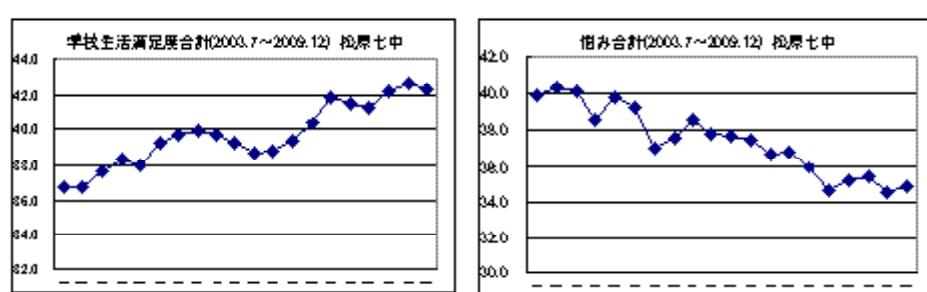
松原七中では平成15年度より、恵我小・恵我南小においては平成19年度より、人間関係学科の効果を測定するために6つの領域からなる「学校生活調査（小学校4件法、中学校5件法）」というアンケート調査を児童・生徒対象に実施している。項目は、a 学校生活満足度 b 悩み c ストレス反応 d コーピング e ストレッサー f 自己肯定感（小学校高学年と中学校のみ）の6領域である。実施対象と実施時期は、小2～中3までは各学期末ごと、小1は3学期から各学期末ごととなっている。その他、人間関係学科実施後の「ふりかえりシート」、10月に教育相談用の「ほっとアンケート」、各学期末に中学校で実施している「HRS自己評価」、学校教育自己診断（児童・生徒用）がある。保護者に関しては、人間関係学科アンケート（保護者用）学校教育自己診断（保護者用）を、教員に関しては、人間関係学科アンケート（教員用）学校教育自己診断（教員用）をそれぞれ12月に実施し、そのデータ集積から効果を測定している。

1. 児童・生徒における実施の効果

学校生活満足度と悩みの得点推移より



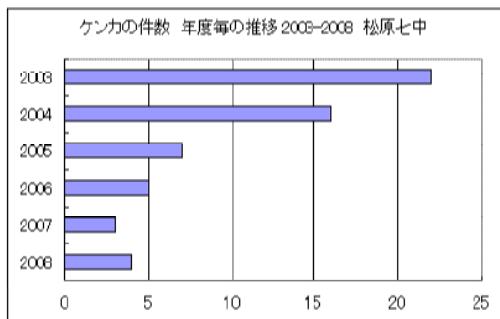
昇り、「a3 先生にほめられたことがある」「a7 困ったとき、助けてくれる友だちがいる」「a8 先生に困ったことを話せる」の3つの項目において、0.2ポイント以上の上昇を見せている。一方、悩み合計においても全ての項目において減少し、「b10 運動が苦手で悩んでいる」「b11 顔やスタイルのことで悩んでいる」の2項目については、0.2ポイント以上減少していることがわかる。



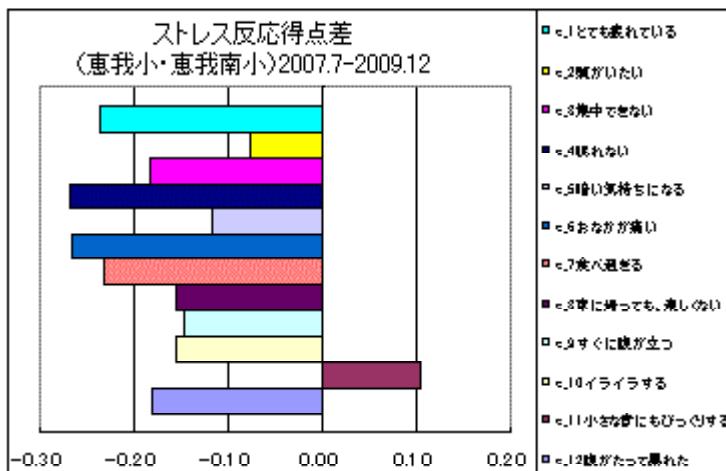
小学校においては、人間関係学科実施後の平成19年7月から平成21年12月までの恵我小・恵我南小の3年生から6年生までの全員の数値を合計し平均値を割り出した。学校生活満足度と悩みの数値の推移をみた。学校生活満足度合計は増加し、それに比例して悩み合計が減少していることがわかる。項目別に見ると、学校生活満足度においては全ての項目が上

松原七中においては、研究開発の指定を受けて7年目ということもあり、平成15年度から平成21年度に至るまでの推移をグラフにした。平成18年度は、移行措置として人間関係学科の実施を

20時間程度に抑えたということと、教員の大量異動等が原因で、学校生活満足度の数値は減少しているが、改めて校区として研究開発に取り組み始めた段階で上昇し始め、本年度7月調査では、今までの最高値である42.6ポイント(50点満点)にまで到達した。平成15年度からおよそ6ポイント上昇し、質問が10項目なので、1つの質問につき0.6ポイント上昇したことになる。人間関係学科実施後、楽しいと思える学校づくりをめざしてきた結果が、生徒たちの学校生活に対する満足度を増し、

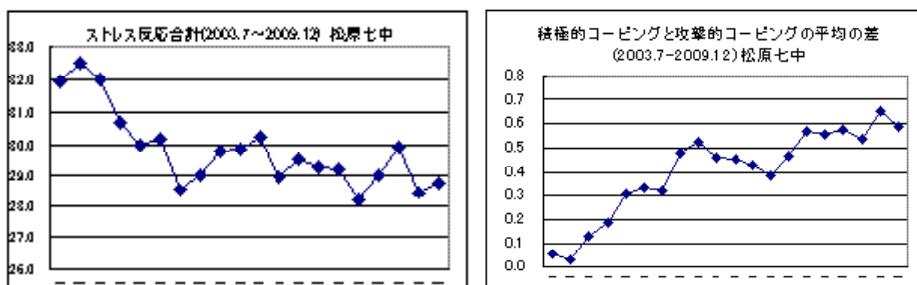


悩みを減らしてきたと言える。左のグラフは松原七中における暴力がからんだケンカの件数であるが、年を追うごとに減少してきた。かつては、市内でももっとも生活指導面で厳しい状況だったが、現在では、非常に落ち着いた学校に変容している。この人間関係学科の取組の成果を校区小学校と共有することにより、松原七中校区が豊かな人間関係に満ちあふれた地域に発展していくよう、校区として取り組んでいく意義である。



反応は「Pearsonの相関係数で0.596、ストレッサー合計 - ストレス反応は0.577、1%水準で有意〔両側〕」という結果を得ている。)上のグラフは、恵我小・恵我南小のストレス反応における得点差である。12項目中11項目においてマイナスになり、合計点(5件法、60点満点)においては、1.33ポイント減少している。しかし、コーピング差(積極的コーピング - 攻撃的コーピング)には明確な成果があらわれておらず、ストレス認知の観点は重要ではあるが、小学生の発達段階においてはリラクゼーション・呼吸法などの手法が重要だと言える。

松原七中においては、1年生の2学期に、ストレスマネジメント学習を展開し、その後、アサーティブな表現や主張、感情対処、リフレーミングなどの学習へとつなげている。その結果、下のグラフのようにストレス反応合計は減少傾向にあり、積極的コーピング(「d1 スポーツで発散する」「d2 友だちに相談する」「d3 家族に相談する」「d4 先生に相談する」の平均)と攻撃的コーピング(「d5 モノにあたる」「d6 人が嫌がることを言う」「d7 人を叩く」の平均)の差が広がっている傾向にある。平成21年



7月の調査では、その差が0.647とこれまでの最高値となった。これは、教員の相談力の向上というものがある。イライラしたときに「d10 学校を休む」子を登校回避感情をもつ子と

| 実施 | Pearson の相関係数 | 3 4 5 の割合 |
|-----------|---------------|-----------|
| ① 2003. 7 | 0.026 | 16.7 % |
| ② 2003.12 | 0.240 ** | 8.1 % |
| ③ 2004. 3 | 0.118 | 10.8 % |
| ④ 2004. 7 | 0.103 | 10.7 % |
| ⑤ 2004.12 | 0.119 | 8.5 % |
| ⑥ 2005. 3 | 0.114 | 15.0 % |
| ⑦ 2005. 7 | 0.189 ** * | 12.7 % |
| ⑧ 2005.12 | 0.097 | 9.9 % |
| ⑨ 2006. 3 | 0.227 ** * | 10.9 % |
| ⑩ 2006. 7 | 0.143 ** | 8.4 % |
| ⑪ 2006.12 | 0.106 | 11.0 % |
| ⑫ 2007. 3 | 0.025 | 13.3 % |
| ⑬ 2007. 7 | 0.096 | 9.2 % |
| ⑭ 2007.12 | 0.245 ** * | 11.0 % |
| ⑮ 2008. 3 | 0.096 | 13.3 % |
| ⑯ 2008. 7 | 0.182 ** * | 10.2 % |
| ⑰ 2008.12 | 0.338 ** | 12.7 % |
| ⑱ 2009. 3 | 0.181 ** * | 11.2 % |
| ⑲ 2009. 7 | 0.247 ** | 7.7 % |
| ⑳ 2009.12 | 0.139 ** | 9.0 % |

* 相関係数は 5 % 水準で有意（両側）です。
** 相関係数は 1 % 水準で有意（両側）です。

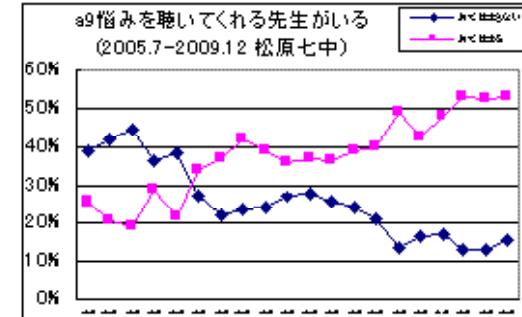
して位置づけて「d10 学校を休む」という項目と「d4 先生に相談する」という項目の相関を見たものが左の表である。参考までに「3. どちらとも言えない」「4. あてはまる」「5. かなりあてはまる」と答えた子どもの全体に占める割合をつけ加えている。取り組み始めてから平成 19 年度までは、まばらにしか相関が出ていないが、平成 20 年度・平成 21 年度の調査には全ての調査にもれなく相関があらわれている（**、又は *）。登校回避の感情をもった子どもたちから教員へと「相談」のベクトルが発されているということをあらわしているのである。人間関係学科の実施やカウンセリングに関する研修の積み重ねや、教員どうしのアサーティブな関係性をめざした職場づくりの成果として、教員の中に安定した相談力がついてきたと考えられる。

子どもどうしの関係



に助けてくれたり、悩みを相談できる友だちがいる」ということは、「友だちと楽しくすごす」以上の関係性が問われることである。その数値が平均で恵我小・恵我南小においては 3.54 (4 件法)、松原七中においては 4.27 (5 件法) [ともに平成 21 年 12 月調査] に至っているところに、子どもどうしの関係性が強まっていっていることうかがえる。

子どもと教員との関係



小学校の「a7 困ったとき、助けてくれる友だちがいる」と中学校の「a5 悩みを相談できる友だちがいる」とのグラフである。「困ったとき

に助けてくれたり、悩みを相談できる友だちがいる」ということは、「友だちと楽しくすごす」以上の関係性が問われることである。その数値が平均で恵我小・恵我南小においては 3.54 (4 件法)、松原七中においては 4.27 (5 件法) [ともに平成 21 年 12 月調査] に至っているところに、子どもどうしの関係性が強まっていっていることうかがえる。

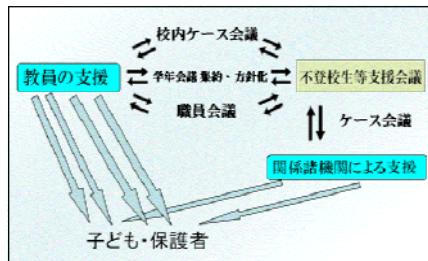
子どもと教員との関係は、小学校では「a3 先生にほめられたことがある。」の数値が上昇し続けている。人間関係学科の目標

のひとつである自己肯定感を高めていくために、子どもたちを評価しフィードバックを返していくとい

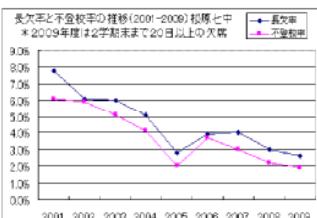
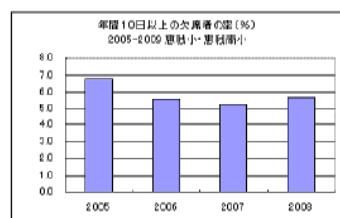
う作業を、恵我小・恵我南小とともに人間関係学科だけでなく、全領域において行ってきた成果である。

松原七中では、「a5 悩みを相談できる先生がいる」の項目において、平成 15 年 3 月調査より「あてはまる」「あてはまらない」の数値が逆転し、「あてはまる」が「あてはまらない」の差が大きく開きつつある。いじめ・不登校の未然防止の観点での相談活動の充実の成果であると考えられる。

不登校への取組

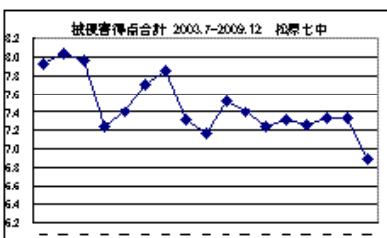


不登校の未然防止の人間関係学科の開発とともに、研究開発の課題の一つとして不登校生等への支援がある。左のチャートは、松原七中校区の不登校生等支援をあらわしている。各校で校内不登校生等支援会議を設置し、校区不登校生等支援担当者会議、校区不登校児童生徒支援会議を開催し、校区で一貫した不登校生等への支援と、関係諸機関と連携した支援をしている。教員の支援は、担任のみに任せることではなく、学年代表と担任が情報を共有し、学年会議での話し合いを経て各校の不登校生等支援会議で話し合われる。不登校生等支援の柱は校内不登生等支援会議である。学校の中心メンバーはもとより、学年代表、養護教諭、カウンセラー、アドバイザーなどの各校の支援スタッフが結集し、支援が必要な子どもたちへのアセスメントと支援策を協議していく。結果として、管理職も含めた複数の教員の支援とカウンセラー・関係諸機関から支援が必要な子どもへ届くことになる。左のグラフは小学校における年間10日以上の欠席者の率のグラフと中学校における長欠生と不登校生の率のグラフである。



松原七中では、病気などの長欠生も支援が必要な子どもとしてとらえ、支援を行ってきた。不登校生等の学校復帰のための家庭と学校との中間ステーション「ほっとスペース」(写真左)では、現在1名(3年女子)が利用している。1年3学期から引きこもってしまった彼女が2年生より「ほっとスペース」での勉強をはじめ、部分的ではあるが学級復帰を果たし、現在では高校への進路も決定している。

いじめ未然防止の取組



学校生活調査の中にある「b4 無視される」「b5 嫌なことを言われる(される)」「b6 仲間はずれにされる」「e17 人からの陰口、うわさ話をされること」を合計した点数を被侵害得点(小学校16点満点、中学校21点満点)

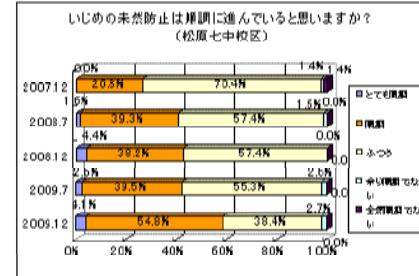
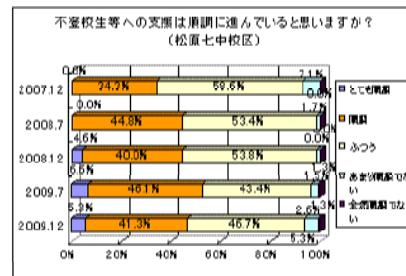
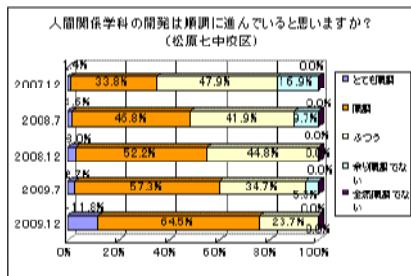
として位置づけて、その推移を見た。小学校も中学校も増減を繰り返しながらではあるが減少傾向にあることがわかる。松原七中では、平成19年度から10月の教育相談(二者懇談)に向けて「ほっとアンケート」という、子どもの生活度、被侵害度、キャリア意識をはかるアンケートを実施している。学校生活調査の被侵害得点とも兼ねあわせて、いじめ未然防止に関わって、子どもたちと教員がつながる手段として活用している。日常の相談活動とあいまって、子どもたちと教員のつながりが強まっていくことで、子どもたちの中におけるいじめに対して、大きな抑止力となっていることはまちがいない。さらに、子どもたちは、一つひとつの人間関係を構築していく作業に人間関係学科の取組を通じて、自立する力と人間関係を調整する力を育てていく。そのプロセスを通じて内発的なエネルギー(エンパワーされた力)を生み出し、子どもたちの集団内部で、いじめに関わるような事象を排除し、集団を浄化させていく力につけてるのである。まさに、人間関係学科が、生徒指導の観点で開発的予防的な「ガイダンスカリキュラム」として機能していると考えている。

小中の連携



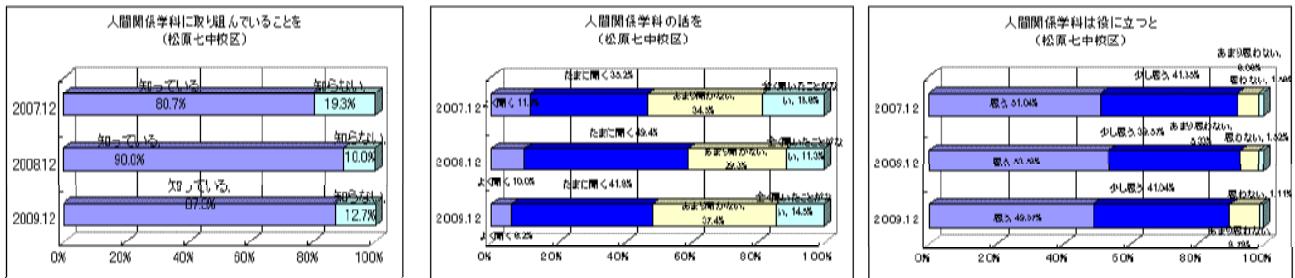
松原七中校区では、小・小(恵我小・恵我南小)どうしの連携、幼(恵我幼)・中(松原七中)の連携、小・中の連携を可能な限り追求している。小・小においては、二校合同の学年会を経て、授業の相互実施や教員交換に取り組むことで、授業内容の精度を高めている。幼・中においては、中学生が幼稚園の授業にファシリテーションリーダーとして入り込み、幼稚園の子どもたちへの「お兄ちゃん・お姉ちゃんモデル」として登場している。小・中においては、小学校6年生と中学校1年生との間でコラボレーション授業に取り組み、小中の段差を無くそうとしている。左のグラフは、小中の学校生活調査における学校生活満足度(50点)の数値を並べたものである。平成19年7月調査・平成20年7月調査の小6と中1の数値を見て頂きたい。明らかに満足度における段差があることがわかる。子どもたちが中学校に入ると、新しい仲間との出会い、授業における学級担任制から教科担任制への移行、「勉強」重視の学習スタイル、クラブ活動から部活動への転換など、子どもたちの世界は一気に広がり、楽しさ度や期待感は急激に高まる。しかし、少数ではあるが、人間関係づくりの苦手な子どもは、その上昇についていけず、不登校に陥ってしまう可能性が高いのである。ところが、校区連携の取組により、平成21年7月調査においては、その段差が明らかに小さくなっている。連携による成果が出てきたといえる。

2 教職員アンケートから



これまで、平成19年12月、平成20年7月、12月、平成21年7月、12月と恵我小・恵我南小・松原七中・恵我幼稚園の教員を対象に研究開発アンケートを実施した。その中から研究開発の中心課題に関わる3項目(「人間関係学科の開発は順調に進んでいると思いますか？」、「不登校生等への支援は順調に進んでいると思いますか？」、「いじめの未然防止は順調に進んでいると思いますか？」)について見ていくと、本年度12月のアンケートでは、「とても順調」「順調」という答えを合わせた割合は、「人間関係学科は～」は7割5分、「いじめの未然防止は～」については6割弱となった。人間関係学科実施における開発と指導スキルのアップを実感している教員が徐々に増えた。いじめに関する認識についても、積極的認知を進めているにも関わらず、事例自体が人間関係学科の実施により質的な変化したことを教員が感じているからではないだろうか。しかしながら、「不登校生等への支援は～」に関しては、不登校生等の実態というものがさらに悪化していることもあり、進展度がなかなか感じられないという教員もいる。不登校生等の担任であれば、なおさらそう感じることであろう。そのような受け止めを、担任個人が背負い込む形で取り組むのではなく、さらに教員どうし、学校どうしが連携したアセスメントと支援の実施をめざしていかなければならない。

3 保護者アンケートから



平成19年12月、平成20年12月、平成20年12月の3回にわたり、松原七中校区保護者対象にアンケート調査を行った。「人間関係学科に取り組んでいることを知っていますか?」という質問に関しては、平成19年度からは約10ポイント上昇し、90%の保護者の認知を得た。「人間関係学科の話を家庭で子どもから聞いたことがありますか?」という質問では、平成20年度が5割を超えたが、平成19年、21年は5割に達していないし、「よく聞く」という回答が減少している。家庭内のコミュニケーション不足の問題、あるいは、「人間関係学科が役に立つと思いますか?」という質問の「思う」の割合の減少などによる保護者の変化なども影響があると考えられる。しかし、もう一度原点に返り、地域・保護者を巻き込んだ地域づくりとしての人間関係学科という意識を高めていかなければならない。人間関係学科は役に立つと思っていない保護者の意見も参考にしながら、教員自身が自分の心を開き、子どもたちへの良いモデルとなっていかなければならないと考えている。次のような保護者からの意見を糧に、これからも頑張っていきたいと思う。

- * アンケート用紙に「これからも継続して・・・」と書いてあり、安心しました。ずっとやり続けてください。周りの人を思いやれる子どもになって欲しいと思います。
- * 子どもも「あいあいタイム」が大好きで、人として大切な事をいっぱい教わる大事な授業だと思うので、こえからも続けて欲しいし、できれば増やして欲しいです。今の時代、必要な授業だと思うので、全国に広まればいいなあと思います。
- * 学校の雰囲気がよく、子どもたちは生き生きしている。

(学校教育自己診断 平成21年度89%、平成15年度は67%)

研究実施上の問題と今後の課題

1) 実施上の問題点

校区で一貫した取組をめざし、継続した内容創造のための、校内・学校間の諸会議の設定の難しさ。
教員間、学校間における意識のちがいを、プラスに作用させることの難しさ。
校区での成果を客観的に評価し、成果を発信しつつ内部に返していくことの難しさ。

2) 今後の課題

松原七中校区としての人間関係学科実施指針をよりどころとして、11年間のカリキュラムに沿った人間関係づくりを、校区で継続して取り組んでいく。
校区として不登校生等支援といじめの未然防止に関わって、校区で一貫した内容と体制で取り組む。
アンケートの実施と効果測定を継続して取り組んでいくためのシステムづくりに取り組む。
人間関係づくりを地域のものとしていくために、地域人材の活用や、地域への発信を行う。
研究開発の内容を積極的に広げていくために、諸研究会への参加や、出張ファシリテーション、学校訪問の受け入れを継続していく。また、松原七中校区研究開発HP

(<http://www.e-kokoro.ed.jp/matsubara/matsu7/08koukuenpatsu/koukyouyoushi.htm>)等を活用し、外部と連携を図る。

以上を推進するための研究組織の改編を行い、継続的に取り組むことをめざす。

平成21年度 運営指導委員会

| 名 前 | 所 属 | 職 名 |
|-------|-------------------------------|------------------|
| 西井 克泰 | 武庫川女子大学大学院 | 教 授 |
| 中村 昌子 | 大阪府教育委員会 児童生徒支援課 子ども支援グループ | 主任指導主事 |
| 田中 賢一 | 大阪府教育委員会 児童生徒支援課 生徒指導グループ | 主任指導主事 |
| 神崎 雅子 | 大阪府教育委員会 小中学校課 教務グループ | 指導主事 |
| 近藤 欽一 | 松原第七中学校区 | 研究開発学校 アドバイザー |
| 前田 正人 | 松原市地域教育協議会 | 会 長 |
| 池田 真季 | 松原市教育支援センター | 相談員 |
| 土師 佳子 | 松原市立恵我幼稚園 | 園 長 |
| 前崎 卓 | 松原市教育委員会 | 教育推進課課長 |
| 橋本 巧一 | 松原市教育委員会 | 学校教育部参事 |
| 稻垣 久代 | 松原市教育委員会 | 指導主事 |
| 横田 雅昭 | 松原市教育委員会 | 指導主事 |